



三村崑山『芳山遊草』翻刻・注

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00007551">https://doi.org/10.24729/00007551</a>

# 三村崑山『芳山遊草』翻刻・注

湯城吉信\*

An Annotated Reprint of Mimura Konzan“Houzanyuso”

Yoshinobu YUKI\*

## 要旨

江戸時代、懐徳堂学派の学者は盛んに各地を訪れた。特に、吉野には何人もの学者が訪れ紀行を残している。本稿では、中井履軒の高弟、三村崑山（1762－1825）が文政5年（1822）の吉野行を記録した漢文紀行『芳山遊草』を翻刻する。懐徳堂学主を務めた中井竹山著『芳山紀行』や竹山の子中井蕉園著『騶碧囊』に比べ素朴な記述に特徴がある。

**キーワード:** 芳山遊草, 三村崑山, 吉野, 花見, 桜, 懐徳堂

## 1. はじめに

本稿は、懐徳堂で学んだ三村崑山（1762－1825）著『芳山遊草』の翻刻である。同書は大阪府立中之島図書館に貴重書として所蔵されている（請求記号「甲和162」）。崑山は中井履軒の弟子であり、自らも塾を開いた。作品として、日本の小咄を翻訳した漢文笑話集『花間笑語』などを残している。

吉野行当時、崑山は還暦を迎えていた。足が弱っており不安もあったが、友人の越智士亮や大塚鳩斎（伊丹の酒造家）に誘われ出発を決心した。旅行の前後は雨が降ったが幸い旅行中は天気恵まれ、気の合う仲間とともに8日間の楽しい時を過ごした。鳩斎が醸造元であるため、酒に恵まれたのも幸いであった。

『芳山遊草』にはその旅の様子が漢文で詳細に記録されている。懐徳堂の先人である中井竹山の『芳山紀行』や中井蕉園の『騶碧囊（りゅうへきのう）』に比べ、歴史考証は少なく、相対的に道中での出来事や土地の風俗など事実の記録が多い。

テキストは、達筆の抄であり、冒頭（内題）に「崑山三村先生著」とあることから、崑山の自筆でないことは明らかである。冒頭の一葉のみ返り点が施されている。点（朱の読点）は全体に施されている。大正2年6月24日の受入印がある。全10葉（毎葉18行）。

その他、大阪市立中央図書館に、『懐徳堂諸先生逸詩』



図1 『芳山遊草』冒頭

と題して登録されている写本（請求番号「C961-105」）の中に「芳山遊草」という内題で写本が見える。全11葉（毎葉20行）、版心下に「懐徳堂」と刷られた懐徳堂箋に筆写されている。末尾に「丙辰季春 有芳写」（丙辰は1856年）と見える。「技」を「伎」、「軒」を「斬」とするなど明らかな誤りが多いため、校勘は表現が違う箇所に限った。

## 【凡例】

- ・漢字は通用字体に改めた。
- ・句読点は、句点と読点とに分け、台詞には「」を施した。（点を省いた箇所もある。）
- ・適宜、段落分けした。

2014年8月18日 受理

\* 総合工学システム学科 一般科目文系  
(Dept. of Technological Systems : Liberal Arts)

・注と訪問地の現在の様子を表す写真とを挿入した。写真は、2010年5月16日および2011年11月14日の調査において撮影したものである。

## 2. 翻刻

### 【題名】

外題「芳山遊草 三村崑山著 完」

内題「崑山三村先生著 芳山遊草」

### 【本文】

予欲遊芳山有年矣。為事所阻而未果。文政壬午之年\*二月、忽聞友人越智士亮\*、与糸海\*大塚士謹\*有遊芳之約也、乃自奮曰、「吾老乏勝具\*、然猶日可歩数里、若今而不往、衰廢益\*甚、則悔之無及矣。況壽不可期乎。幸有是良伴、不可失也。」見士亮告其意、士亮以告士謹。於是乎約成、期以二十日。前夜風雨。

### 【校勘】

○壬午之年 中央図書館本は「壬年之」に作る。

○益 中央図書館本は「日」に作る。

### 【注】

○壬午之年 文化5年(1822)。

○越智士亮 木崎愛吉『篠崎小竹』33頁でこの吉野行に言及する箇所では、越智高州という。篠崎小竹(後出)の親戚つづきに当たるといふ(72頁)。『続浪華郷友録』(文政6年)8葉表にも見える。名は翼、俗称文平で、近江町に住んだといふ。

○糸海 伊丹(いたみ)。「いたみ」の語源は、板の橋の上(かみ)に位置するところ「板上(いたかみ)」の転とする説、細かい入江のような海が入り込んでいた地形から「糸海(いとみ)」とする説、紡績が栄えたことから「イト(糸)・ウミ(績み)」の転とする説などがある。

○大塚士謹 前述『篠崎小竹』では、醸造家の大塚鳩斎といふ。現伊丹市東有岡5丁目127番地、杜若寺内に頼山陽撰の碑文が彫られた大塚鳩斎の墓がある。碑文によれば、鳩斎はそれまでの芳醇な酒ではなく清淡峻烈な酒を醸造したといふ。文政己丑(1829)に62歳で病没したといふ。崑山よりやや若かったことになる。また、大阪府立中之島図書館蔵『麗澤簿』(篠崎小竹門人帳)(甲和666)の天保3年(1832)に「大塚五郎助 伊丹人」と記されている。あるいは鳩斎と関係するか。

○勝具 景勝地を渡る道具、すなわち足。

二十日、卯後開霽、風猶厲。士謹味爽\*発糸海、至府下客舎、走奴促予会士亮氏、先是予以風雨之故、窃謂是当緩

期、士謹必不来矣。忽聞是信、驚士謹之壯也。乃遽然治装而往焉、則時已過辰矣。士謹所從兩奴、其一担双衣箱、其一齎行厨一、水火炉一、酒尊大小四、通容一斗六升、即其家釀\*也。由玉造而南、取道平野。且行且語、輒為風所噉、言者如瘡、聞者如聾。晡時\*宿古市則風定。逆旅駅之東偏、山水当牖而見、秀媚可愛、約明旦臨流卯飲\*而寢。

### 【注】

○味爽 夜明け方。

○即其家釀 士謹は醸造元であったのであろう。懷徳堂と伊丹や池田の酒屋とはつながりがあった。

○晡時 申の刻。夕方。

○卯飲 朝酒。

二十一日、早起、以前程遠、不果宿約而発。踰竹中嶺\*至御所、遇微雨、予欲輿、会有角觥\*戲焉。觀者傾駅、不得扛夫、乃欲宿戸毛、士謹嘗訪人注記逆旅佳者、於是先遣一奴占逆旅、奴錯認其名居、邀入他家、而皆不知也。既至、則壁殘席敝矣。饌具衾褥之擯請\*、亦可想、皆相目憮然、然業已約定、無奈之何、且酌酒遣悶。頃之雨止、予附士謹耳曰、「以天幸霽、日猶高為辞而去、可乎。与其病主人之不憚、孰若免一夕之無聊。」士謹頷焉、乃如予言而出。予再索輿、駅中唯一扛夫、士謹乃使其奴為之対、亦角觥為崇耳。遂宿土田。二人皆言車阪之險勝於竹中\*、予時在輿眠、不覺其險也。

### 【注】

○竹中嶺 竹内(たけのうち)峠。

○角觥 相撲。御所(ごせ)は相撲の始祖とされる當麻蹶速(たいまのけはや)の出身地とされ、相撲が盛んだったようだ。ちなみに、崑山は相撲が好きであった。大阪府立中之島図書館蔵『(橋)聞記』卷二(甲和350)に「崑山原(崑山は名が其原)の名を付す「觀角觥記」といふ文章があり、「余性喜觀角觥(私は相撲を見るのが好きだ)」と述べる。ちなみに、竹山にも、相撲を記した「觥觥図序」といふ文章がある(『奠陰集(文集)』卷6、8葉、明和7年の作)。竹山と面識のあった「悍驚」といふしこ名の播磨出身の相撲取りが画家に描かせた相撲図への序文である。

江戸時代、大坂は相撲が盛んであった。新田一郎『相撲の歴史』、『大阪相撲の歴史』(大阪歴史博物館平成17年特別展示図録)などを参照されたい。

○擯請 「りょうそう」。ごたごたすること。ここでは粗末なことをいっているのであろう。

二十二日至芳川\*。濶可百歩、水底砂礫周布、織鱗往来可数也、航而乱\*。經六田、漸入山中。目之所触、左右遠近、

莫不樺樹。然花候未至。開者屢々乎如晨星\*、而未開者、蕾葉皆赤、宛然類楓、可謂併春秋之賞矣。蓋此地之樺、花少於葉、單瓣而小、地氣使然耳。回首、則他山往々有雪、花候之遲可知也。而貝原益軒\*、以立春後六十五日為芳花之候矣。今年閏在正月、是日距立春既六十八日、而其遲猶如此者何也。嘗閱『盍簪錄\*』、論百年二百年中、或屬陽運、或屬陰運、寒暑不均之故。予自驗之。近年寒氣之至、比予少小之時較遲、而餘寒或及春季、暑氣亦準之。夫益軒、豈欺我哉。亦唯當時氣候、與今時不同耳。乃以今時度之、世俗七十五日之說、大抵似不差矣。

至千株樺、景致尤佳。停杖相酌多時、獨士亮患咳不欲飲、予亦為之不能成醉也。過此、則民家密比對列、無慮\*千餘戶儼成一大邑、而逆旅則居三之二。宿藏王門\*近側。蓋逆旅之設、為大嶽香火之人及遊客。吾曹之來、先於花候而遠於香火之時\*、故逆旅閑寂、無喧擾之煩、是亦一適也。

〔校勘〕

○屢々乎如晨星 中央図書館本は「未及三十之一」に作る。

〔注〕

○芳川 吉野川。



図2 吉野川 (2010. 5. 16)

○乱 渡る。川を横切る。

○貝原益軒 『花譜』中巻(1698)「桜」の項に「吉野山の桜も、立春より六十五日をさかりとす。…」とある(『益軒全集』巻1、144頁)。

○『盍簪録』 伊藤東涯撰の隨筆集。この話は、巻4「雜載篇」に見える。気候の変動は陰陽が百年単位で変わるためであろうという。

○無慮 およそ。

○藏王門 藏王堂の門(仁王門)のことであろう。門前には今も門前町が続いている。

○香火之時 貝原益軒『和州巡覽記』の「青折(あをり)の嶽(たけ)」の項に「毎年六月朔日より同七日まで、諸人潔齋して上る。…」という(『益軒全集』巻7、65頁)。

現在の藏王堂では、二月の節分、四月の花供懺法会、

七月の蓮華会が三大大行事となっているが関係するか。



図3 藏王堂仁王門 (2010. 5. 16)

二十三日、倩\*郷導\*歴觀藏王堂、及実城\*、吉水\*、喜藏\*、竹林\*等僧寺。竹林堂後有一丘\*、得徑而登、平坦曠豁、青草如茵、嚮所經之諸寺、拳在目下、四方群山可坐眺也。鬪\*而飲、歡賞移晷\*。出門而右、路漸險峻、名曳猿阪\*。逶迤\*而上、可六百歩、氣息喘々、不能自禁。而山民粥材木者、男負婦戴、陸続下阪。問其重、則曰少者百斤、多者倍焉、衆皆愕眙\*嗟異\*。自此東南北、杉栢極多、不知幾千万章、其価如菜蔬云。阪上有世尊寺\*、其鐘以熟銅所鑄、稱芳野三郎鐘。不詳其人、実六百年外物也。

遂窮奥阪、探子守祠\*、踢脱塔\*、安禪寺\*、西行廬\*等、而還逆旅。蓋自 天武帝之龍興于此地、源使君之竄身、王子護良之唱義、 延元帝之駐蹕\*、相望于史冊、山僧以為奇貨、設以妄誕不經之事、駕以荒唐悠繆之譚。西行廬及苔泉\*、已係擬造、然尚可言也。至於踢脱塔、則其妄誕不俟言矣。其他、如吉水之馬蹄跡\*試力石\*、是也。嘗聞如意輪寺\*、藏敗扉一扇、即楠正行躬鏃書其絕命辭者、近年有摹刻而伝焉者。予窃疑其贋、及閱中井伯毅『騶囊』\*、則曰、史称小楠子作絶命辞、鏃書寺壁、而今所伝者扉矣、且其刻精緻、頗有刀法、非成于鏃者也。則為贋物明矣。可謂具眼也。吾曹之遊、專在賞禽花樂山水、至於故事故蹟、則載于前史、而其辨論、具于竹山先生『遊記』\*、故往々忽略之、不甚欲觀。亦不復推究其說也。

〔注〕

○倩 備う。

○郷導 道案内。

○実城 実城寺。吉野朝宮跡地。実城寺は現存しないが、今は南朝妙法殿が建ち、皇居跡公園として整備されている。

○吉水 現吉水神社。明治8年に寺号を廃して神社にしたという。





図4 吉水神社門 (2011. 11. 14)



図7 花矢倉展望台からの眺望 (2010. 5. 16)

○喜蔵 喜蔵院。



図5 喜蔵院門 (2010. 5. 16)



図8 吉野三郎鐘 (2010. 5. 16)

○竹林 竹林院。庭園が有名。

○竹林堂後有一丘 現桜展示園。

○鬮毬 原文では両字とも毛が左にある。「くゆ」は毛毬(敷物)。

○移晷 晷(き)は影。時を移すこと。

○曳猿阪 猿引坂。



図6 猿引坂 (2010. 5. 16)

○子守祠 子守神社の総本社吉野水分(みくまり)神社のこと。俗称子守明神。

○踢脱塔 義経蹴抜の塔。奥千本にあり。



図9 義経蹴抜の塔 (2010. 5. 16)

○安禅寺 現金峯神社付近にあった寺で「吉野奥の院」と称された。明治維新で廃寺となった。伽藍の様子は元禄期の貝原益軒『芳野山勝景図』で確認できる。現在、愛染の宿(安禅寺寶塔院=修験道者の宿坊)跡の看板だけがある。

本尊は蔵王権現、また役行者の遺像を安置していたという。多宝塔も存在していたが、明治になって棄却された。ただ、蔵王権現像は、現在、金峯山寺にあり、大阪市立美術館「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録記念 特別展『祈りの道～吉野・熊野・高野の名宝～』166頁に写真が見える。

○透迤 「い」。曲がりくねる様。また長く続く様。

○粥 ひさぐ。

○愕眙 「がくち」。驚いて見る。

○嗟異 「さい」。感心して褒める。

○世尊寺 明治の廃仏毀釈で廃寺となった。現在は吉野三郎鐘だけが残っている。ここからの中千本、下千本の眺めは絶景で、現在、花矢倉展望台がある。

○西行廬 西行庵。奥千本にある。



図10 西行庵 (2010. 5. 16)

○源使君 源義経。

○王子護良之唱義 護良親王の元弘の乱 (1331) への参戦。

○延元帝之駐蹕 後醍醐天皇が延元元年 (1336) 吉野に身を寄せたこと (南朝)。前の空格は敬意を表す。

○苔泉 苔清水。西行庵近くの泉。西行が歌に詠んだとされ、常に枯れることがないとされる。今も現存する。



図11 苔清水 (2011. 11. 14)

○馬蹄跡 吉水神社の義経の馬蹄跡。義経が馬に乗って岩に駆け登った時に出来た馬の足跡だと言われる。



図12 義経の馬蹄跡 (吉水神社) (2011. 11. 14)

○試力石 吉水神社の弁慶力釘。弁慶が力試しのために指先で岩に釘を二本押し込んだ釘と言われている。



図13 弁慶力釘 (吉水神社) (2011. 11. 14)

\*上部に釘を打ち込んだような窪みが見える。

○如意輪寺 同寺に楠木正行辞世の扉が残されている。楠木正行が四条畷の戦いに出陣する時に、「かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとどむる」と本堂の扉に辞世の歌を刻んだ扉とされている。



図14 如意輪寺 (2011. 11. 14)

○中井伯毅『騶囊』 中井竹山の子蕉園著の吉野紀行。吉野行に取材した『碧囊』と対になっている。1795年の作。(参照:拙稿「中井蕉園著『騶碧囊(りゅうへきのう)』の吉野行(上)」。)

○竹山先生『遊記』 中井竹山著『芳山紀行』のこと。1763年の作。

二十四日、朝餐畢將発、会友人彼承弼\*造焉。承弼前日、与長田雀洲\*俱来遊于此也。昨相遇於途中、故今乃自其所宿僧舍来訪也。贈以詩一篇、与土亮困某、纔竟一局、匆匆分手。皆輿而出、再由前路、抵安禅寺前、分岐左転、忽得長崗\*、形如馬背、僅通一人、両旁如削、下臨深谷、若一蹉跌、身乃粉壘、輿中惴々、殆将眩暈悸。行数百步、崗断入峡間、灌木叢篠、夾路森列、鳴禽之外、万籟息響、既而愈卑愈窄、扛夫曰、「輿不通、請歩。」乃皆下輿、路極險惡、棘刺鈎衣、石尖\*砭足、足与目謀、杖先步撐、猶且将顛者再矣。

行半里、稍坦広、復就輿、有礪流\*、厲\*而涉、即琵琶山\*趾也。迂回而上、有瀑曰蜻螟\*、懸流数十丈、巉巖環擁、如繚牆\*、而缺四面之一、巖下無路、可傍巖腹而望焉、



瀑之形、上殺而下豊、故其勢、或直遂、或斜突、如積雪之類、如貫珠之迸。変態万状、不可具舉。下流則澄徹如藍、陰々昏昏。蹙乎鳴、砉乎跳、心中快爽、不暇發奇絶於一抔\*、矚目久之。士亮指瀑腰示予。瞰之、則水色青紅成虹\*。蓋為日景所映射而然、亦奇觀也。士謹欲探泉源、旁攀石徑出巖頭。予与士亮疲不能也。欲取小飲、而遺酒於山下、不果而反。

至大瀧村、登一店樓。把酒而望、巖山峙焉、激湍注焉、幽邃清雅、令人生飛遯\*之心。湍上游窄而急、怪巖錯出、如犬牙焉。下流漸闊、到兩山間右折、則徐緩矣。適有円材作桴\*以下者。櫛比五材而束之、首尾累々以藤相繫屬者、凡十五束、駕而操篙者三人、桴触石憂々有声、俯仰婉曲裊々如也。衆皆抵掌稱奇。經国操\*。是

天武帝所潛之地、然国操者莊名、而七村在焉。年代久遠、未可的知。帝居在何処矣。登仏嶺\*、亦甚險冰、在輿猶艱\*不安。夫仏以慈悲為旨、以濟度為要、可謂名背其實者也。

至宮滝、怪巖簇々峙立、自成兩岨、有類禽者、有類獸者、有如階者、有如屋者、有凸似窠者、有凹似甕者、有広平可坐数人者、有峻拔不可攀者、礎壇\*磊砢、不可殫狀。水勢穩而不駛、有潭焉、深而広、渦旋成巴、非滝也、非湍也、是亦名之失実者、然其景物、則莫之与京\*。其下稍狭処、藤編樹枝代梁、以架兩岨\*也。累足而過、有没人\*要過客銜技、聚足立巖頭下両手着髀\*間、躍没潭底、少之洄\*而躋焉。疾於墜葉之隨風、嗟亦奇矣哉。竹山先生亦嘗觀之、其遊記\*曰、「比之蟹丁\*網師、以溟渤\*為家者、技亦微哉。」然予聞之海浜人。曰、「我幼而習於洄、雖驚瀾怒濤、不知其險、以潮水輕而易浮也。乃以此試於江湖川溪則難、以常水重而易沈也。故洄潮水、雖十里易、常水一里猶難。」若夫以潤狹深淺為險夷者、兒童之見也、是言似有理、姑書之、以質於識者。

薄暮宿上市。上市距芳山、纔隔一川、乃知是日所遊歴、殆如循環\*也。予嘗聞邑之豪姓、有大海寺氏\*、愛客。雖遠方未識面、苟有技能者來投利\*、輒止宿之、故客常滿座、有徳大君\*之在紀藩也、亦嘗一駐輪云。及主人來見訪之、曰、「然。是吾主家也。愛客之主人既歿、今之主人、即其子也。今也衰落、宅既為他人之有、家人拳徙別館、而大君所遊覧之亭尚存焉、公等欲觀、則吾導之。」咸曰、「固所願也。」

〔校勘〕

○尖 中之島図書館本は「光」のような字だが、中央図書館本により、「尖」と確定した。

○刺 中之島図書館本、中央図書館本ともに「刺」に見える。

〔注〕

○筱承弼 篠崎小竹 天明元年 4 月 14 日(新暦 1781 年 5

月 7 日)生?、嘉永 4 年(1851)歿。名は弼、字は承弼、通称は長左衛門、幼名は金吾。畏堂・小竹・南豊・退庵・些翁など号した。木崎愛吉『篠崎小竹』33 頁でこの吉野行に言及する中で、崑山にも会ったことが記されている。また、同書 64 頁によると、小竹は酒や碁を好んだようだ。○長田雀洲 未詳。雀は鶴(後出)。『国書人名辞典』に見える京都出身の漢学者永田氏(数名いる)と関係するか。国学者の長田(おさだ)鶴夫(1784—1844)と関係するか。また、大阪府立中之島図書館蔵『輔仁姓名録』(篠崎小竹門人帳)(甲和 665)の文政 8 年(1825)に「長田作之助 作五郎長子」、『麗澤簿』(篠崎小竹門人帳)(甲和 666)の天保 13 年(1842)に「長田恒次郎」という名前が見える。鶴洲と関係するか。

○長崗 馬の背に似るといふ尾根はおそらく青根が峯。

○礪流 谷川。

○厲 石伝いに行くことを言うようだ。『論語』憲問篇に「深則厲、浅則揭」という『詩経』からの引用がある。「厲」については、着物を掲げるとか、着物を濡らすとか諸説あるが、崑山の師中井履軒は『論語逢原』で「厲瀉砢同。以石涉水也。今庭中連置石用為歩道、号曰飛石。水中若斯者即瀉矣」と言う(『説文解字』の砢字の解釈に基づくようだ)。飛び石伝いという意味だということである。

○琵琶山 貝原益軒『芳野山勝景図』に見える。蜻蛉の滝の裏の山。

○瀑曰蜻蛉 蜻蛉の滝。

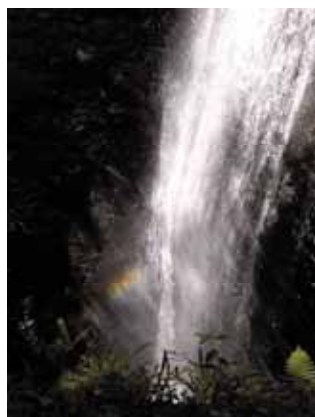


図 15 蜻蛉の滝  
(2010. 5. 16)

○一抔 抔(べん)は手をうつこと。

○繚牆 繚はめぐる。牆は扉。扉を繞る。

○水色青紅成虹 2010 年 5 月現在、蜻蛉の滝の案内板には、「飛沫は太陽に映じて常に虹をつくっていることからこの付近は一名虹光(にじっこう)といわれている」とあった。筆者も虹を実見した(図 15 左図)。

○飛遯 飛遁に同じ。隠居すること。

○桴 いかだ。宣長『菅笠日記』にも描写がある。

「一丈二三尺ばかりの長さなくれを三つ四つづつみならべて、つぎつぎに十六つなぎつづけたるは、いといと長く引きはへたり。」(『本居宣長全集』18巻、525頁)  
○国櫛 国栖(くず)。浄見原天皇(大海人皇子、後の天武帝)は、大友皇子との皇位継承争いで追われる身となり、吉野の山中に逃れて漁師の老夫婦にかくまわれた(『源平盛衰記』巻25「はらかの奏・吉野の国栖の事」)。また、能の「国栖」を参照。

○仏嶺 貝原益軒『芳野山勝景図』に仏峯が見える。吉野奥院から蔵ガ谷、西川(現西河?)に抜ける峠である。ただ、崑山は同じ尾根伝いの五社峠を言っているのかもしれない。大瀧村から宮滝の方に抜けていく際に越えるのは五社峠だからである(今は五社トンネルというトンネルがある)。

宣長『菅笠日記』に以下のようにある。

「かの里にかへりて、またけさくだりこし山路にかかる。けさはさしもあらざりしを、のぼるはこよなくくるしくて、同じ道とも思はれず。さてのぼりはてて、右につきたる道へわかれて、またしものぼる山は、仏が峯とかいひて、いみじうけはしき坂なり。」(『本居宣長全集』18巻、527頁)

○艸脆 「げつごつ」。安らかでない様。

○礎檀 「がながく」。山が聳える様。

○磊砢 「らいら」。石が重なった様。壮大な様。

○莫之与京 並ぶものがない。『春秋左氏伝』莊公22年伝に「八世之後、莫之与京」とあり、注に京は大だという。

○藤編樹枝代梁、以架兩岨 宮滝の「柴橋(しばはし)」。現在も同名の橋があるが、昔はもう少し上流の川幅が狭い所に架かり、旧東熊野街道上の橋で、当時は松の丸太を橋桁にしてその上に歩み板を張り、柴垣で欄干を造っていたという。

また、宣長『菅笠日記』も筏流しの様子を記録する。

「宮滝の柴橋(しばはし)といひて、柴してあみたる、渡ればゆるぎて、ならばぬこちするには、あやふし。またここにも、かの岩飛(いはとび)するものあり。…そののをのこ、まづ着物をぬぎて、はだかになりて、手をばたれて、ひしと腋につけて、目をふたぎ、うるはしく立ちたるままにて、水の中へつぷりと跳び入るさま、めずらしきものから、いとおそろしくて、まづ見る人の心ぞ、きえ入ぬべき。…」(『本居宣長全集』18巻、528頁)

その他、貝原益軒『和州巡覧記』の「宮滝」の項にも以下のようにある。

「里人岩飛とて、岸の上より水底に飛入て、川下におよぎ出て、人に見せ、銭を取るなり。飛時は、両手を身に

そへ、両足をあはせて飛入、水中に一丈許入て、両手をはれば、浮出ると云。」(『益軒全集』巻7、67頁)



図16 宮滝(上流を望む)(2010.5.16)



図17 宮滝の現柴橋(下流を望む)(2010.5.16)

○没人 貝原益軒『和州巡覧記』、宣長『菅笠日記』では「岩飛び」、『西国三十三所名所図会』巻7「宮滝」には「滝飛び」と言う。

○脾 もも。

○洄 泳ぐ。

○蜃丁 蜃は海士(あま)。

○其遊記 前出の竹山著『芳山紀行』のこと。

○溟渤 大海原。

○玦 環状で一部が欠けているおびだま。

○大海寺氏 大名持(おおなもち)神社の中に大海寺という寺があったが、明治になって神仏分離で廃寺となった(現在の神宮寺)。『大和名所図会』(1791年刊)の「大名持神社」にも「妹山にあり。…境内に大海寺あり」と見える。

○有徳大君 徳川将軍。その前の空格は敬意を表す。天皇の前が2字分の空格があるのに対して1字分だけで差をつけている。

二十五日、主人導三人而往。亭臨芳川而構焉、大容五六席、景致頗佳、凭欄一望乃去。辞逆旅、輿而北、登譚山\*。其險不減仏嶺。予偶因險思蜻螟之奇不措、扛夫謂其対夫



曰、「汝既觀蜻蛉瀑乎。其地寂闐\*、瀑声如雷、令人毛髮灑然\*、亦何所樂。」対夫曰、「然。如汝言矣。」夫吾之所賞、渠乃擯之則亡論、但渠之強壯、不若吾老朽之胆、可異也已。

至嶺上、舍輿而歩。下而復上者数百歩、得寺門\*、有禁榜\*、不許婦女出入、祠殿塔閣、丹碧烜耀\*、輪奐\*壯麗、踰於所聞。梅樺桃李、一時争発、粲然可觀\*。傍溪北行、路漸平夷、至慈恩寺村、則往来絡繹、輿馬旁午\*、是謁於勢之 天皇廟之要路\*、故致然耳。自昨離芳山、至此凡十二里、所見旅客、不過兩三人、而今如是、頓覺閑擾之殊。

晡後宿初瀬。此地先年山裂水湧、人畜田舎蕩溺、一夜而為烏有。訪之土人、則曰、「然。在辛未\*之歳、距今一紀」、因語其時事、令人酸鼻。蓋陽氣伏地中積久、則硫黃自生、一時感陰氣而激発也。如昔年富嶽淺嶽\*之燒崩、及薩之桜島肥之島原、皆是也。而邦俗謂之山出海螺、華人謂之出蛟、妄繆之説已。是夜一舍所宿、無慮数百人、詢々攪眠。

〔校勘〕

○輪奐壯麗～粲然可觀 中央図書館本なし。

〔注〕

○譚山 現桜井市にある談山神社。貝原益軒『和州巡覧記』でも紹介されている（『益軒全集』巻7、72頁）。享祿5年（1532）建造とされる十三重の塔が現存する。現存の本殿は嘉永3年（1850）に建て替えられたものだという。



図 18 狩野探龍筆「多武峯図」

○寂闐 闐（げき）も静かなこと。

○灑然 「さいぜん」。驚く様。

○寺門・禁榜 寺門は現鳥居のことか（嶺から下がって上がるというのは、現在も駐車場から一旦下ると一致する）。享和3年（1803）造と思われる東大門（鳥居からは相当離れている）横に、「女人堂」の石碑が見える。あるいはここに女性用の寺があったか。



図 19 談山神社東大門 (2010. 5. 16)

○烜耀 「けんよう」。明らかな様。

○輪奐 「りんかん」。建築物の壮大な様。

○旁午 「ぼうご」。往来の盛んな様。

○勢之 天皇廟之要路 伊勢南街道のこと。天皇の前の空格は天皇に敬意を示すためのもの。

○辛未 文化8年（1811）。この年六月に、「初瀬流れ」と呼ばれた災害があった（『桜井市史』下巻95頁）。崑山は原理を追究し、妄謬を解こうという姿勢を見せている。ただし、初瀬の災害は土石流だったはずで、その他の火山の例とは別のはずである。

○富嶽淺嶽 富士山と浅間山。江戸時代、富士山は宝永4年（1707）、浅間山は天明3年（1783）に噴火している。その後に見える桜島は安永8年（1779）、島原普賢岳は寛政4年（1792）に噴火している。

二十六日、踵長谷寺。自門至堂、磴道施瓦屋者三折\*、広表\*百丈、可以障日、可以避雨。吾友早子発\*曾大父、捐貲\*所營云。堂前堂側、樺樹尤多。花方盛開、所謂開析亦不遺、散落亦不始者。衆皆不勝欣賞、彷徨花間多時、猶不忍去也。予顧二子曰、「芳山之遊、所主在花也。而失於彼、得於此、不亦異乎。若較之以多寡、則雖非彼之敵、而花容之美且大、彼將避三舍\*焉。予寧取膾炙\*之寡、無取小鮮之多也。」二子曰、「然則子不欲復遊於芳邪。」曰、「膾炙雖寡而易饜 小鮮之多、奈其難饜何 予而未就木\*、將再從二子之遊矣。」咸靦然而笑。將去、復邂逅承弼、鶴洲於磴間。立談霎時\*而別。

出門過慈恩寺村、抵三輪北行。自此而至寧楽四亭、頗多名区、遊已倦矣、明日將帰阪、故不遑探尋焉。既至寧楽徧覓\*逆旅、則旅客已填咽\*。將至前亭而投焉、則日方薄暉\*。於是訪尋百方乃得矣、士謹之力也。士謹往歴覽春日祠、巨利数区。予与士亮皆熟知之、故不往也。

次室有数客、常人也。有一商人来、自媒曰、「吾売薬墨者。其製、取春日祠灯烟、和以二月堂香水。与二十四味薬品、可以除心腹諸患、可以治眼疾。吾家在興福寺門前。此地多墨商、而除我之外、無復売焉者。諸君子願試之。」

其辞滾々、如泉之湧。客問其価、則不滿百錢。蓋以其太賤意仮譎也。強之、皆弗応、竟不售一笏\*而去。如蘇秦王\*、雄弁亦有時而屈矣。既而金工布商來、亦弗応。有一人恚曰、「我且寝、勿來攪也。」吾曹聞之匿笑、且嘆遠客之不愚也。

〔注〕

○磴道施瓦屋者三折 磴道（とうどう）は石段。有名な長谷寺の「登廊（のぼりろう）」のこと。実際は200メートルに渡って、三本（二折）ある。貝原益軒『和州巡覽記』では「北へ上り、東へ転じ、また北へ上る」と表現されている（『益軒全集』巻7、74頁）。登廊は長暦3年（1039）に建造されたといわれているが、たびたび火災に遭っており、現存の登廊は明治22年（1889）に再建されたものである。長谷寺は現在も「花の御寺」と呼ばれ、桜の他、牡丹や紫陽花などでも有名である。



図20 長谷寺の登廊（2010.5.16）

○広表 「こうぼう」。広さ、面積。元来、広は東西、表は南北という。

○早子発 早野橋隧（1778-1831）。懐徳堂門人。懐徳堂は漢学塾で中井竹山・履軒らは仏教に反対していたが、弟子は必ずしもそうではなかったのであろう。ちなみに橋隧の父仰齋は薬売りであったという。

○捐貲 「えんし」。金を寄付すること。

○開析亦不遺、散落亦不始 未詳。

○避三舎 一舎は軍隊一日の行程で三十里。三日の行程だけ退却する。転じて、自ら彼に及ばずとして一目置くこと。

○膾炙 「人口に膾炙する」（広く知られる）ということばが有名であるが、もともとなますとあぶりもの。ここではご馳走のことを言うのであろう。

○就木 死んで棺の中に入ること。

○霎時 「しょうじ」。しばらくの間。

○覓 「べき」。もとめる。

○填咽 混み合うこと。

○崑崙 「えんし」。古、日の入ると信じられていた山。「薄」は迫る。

○笏 墨を数える単位。

○蘇秦王 中国の戦国時代の政治家で、縦横家の一人。張儀とともに弁論に優れていたとして有名。

二十七日、発寧楽西行。道左有 垂仁帝陵\*、大池環之。史\*称 帝詔止殉死、有恵政、年登民饒、乃知其諡之弗虚也。至棕嶺\*、有民家十餘戸、皆逆旅也。其東偏相对両家独属和州、而其他皆河州云。吾聞江濃之間、有類此者、而其可臥語\*之奇、亦不異焉。然彼膾炙人口、而此則鮮有知者。凡物之有顯晦幸不幸、往々而然、豈特是哉。就店飲食、買輿至松原\*。晡後入玉造\*、就驪門旗亭\*而憩。自此至家、閭閻\*相連、心中帖然\*。举觴更酌、相与擊飲\*、不知晷之尽也。所齋行厨、士謹每用意周旋、随缺随補、是以雖寒邑僻陋、未嘗告匱、酒則客中不沽一勺、至此正竭。至戌前各分離。明日雨、士謹從客舎帰糸海。

嗚乎、此行也、往反凡八日、後雨而発、先雨而帰。若旅途或遇雨、不特興趣索然、雖輿馬、猶艱於行、矧吾足之不利、而篋笠侵泥濘、欲以探奇窮幽、豈可得哉、一幸也。結伴三人、志同趣、飲同量、年亦在伯仲之間、而兩奴又順良、無有一紛争、二幸也。諸遊芳之人、以芳釀不中飲也、往々齋壺樽、然不過數升、而酒又多不醇。若此行、則酒之醇美、非他邦可比、縱飲日数次、莫不酣暢自適、而酒常有餘饒、雖高貴之遊、或不過於此、三幸也。予欲永矢弗諼、因次序所遊歴、以資異日譚柄。

〔注〕

○垂仁帝陵 前の空格で天皇に対する敬意を表す。現奈良市尼ヶ辻町（唐招提寺附近）に、垂仁天皇を埋葬したとされる宝来山古墳（菅原伏見東陵）が現存する。主全長227m、後円部径123m、前方部幅118mの前方後円墳である。周濠中に小塚が1つ、陪塚が6つある。

○史 『日本書紀』垂仁天皇28年に、倭彦命（やまとのひこのみこと）の墓陵に殉葬された者が苦しむ様子を見て垂仁天皇が殉葬を禁止したという記事が見える。

○棕嶺 棕嶺峠（くらがねとうげ）、別名暗峠（くらがりとうげ）。

○峠の茶屋が二軒だけ大和に属していたこと 未詳。

○可臥語 寝物語。近江と美濃の境の今須宿（現滋賀県米原市）に寝物語の伝承がある。すなわち、国境の小さな溝を隔てて建つ両国の旅籠の泊まり客どうしが、寝ながら話しができたという話である。安藤広重の「木曾街道六十九宿」の今須宿の図は、この地を描いている。現在は石碑のみが建っている。

懐徳堂の学者加藤景範（竹里）著『竹里君関東紀行』（富士山への紀行、東洋文庫蔵）にも、「長久寺といふ里の中に近江とみのの堺木あり。国を隔ててとなり、どち物いひかはすとてここを寝物語となんいふなるべし」という

記述が見える（15 日の記述）。



図 21 棕嶺峠（『河内名所図会』巻 5）

○松原 現東大阪市松原。

○玉造 暗越奈良街道の起点。伊勢参りの出発地として栄えた。当時「つる屋」と「ます屋」という茶店があり二軒茶屋と呼ばれた。暁鐘成『浪華の賑ひ（初篇）』（1855 年刊）に二軒茶屋の画が見える。

○驪門旗亭 驪門は二つの門。旗亭は料亭。上記、二軒茶屋のことであろう。

○閭閻 むら。

○帖然 落ち着くこと。

○鑿歛 鑿は尽くす。

左久羅辨

左久羅之生於我邦也、其美冠于衆花、而殊域莫与比焉者。古来皆充以桜、或以海棠。桜固不可、海棠雖稍似、而種自殊。操觚之士、紛々聚訟、至今為未了公案。予聞之師曰、我邦所謂左久羅、樺、是也。製印板、皆用之。其皮、以充纏束器械之用、故称加婆左久羅、或称加仁婆左久羅。但以我邦風土宜於樺、變生甚多、故單瓣重瓣垂糸彼岸等、其他品類不止十数。是樺者母、而變生者、皆兒孫也。唯母則著花少、純白帶青如梨花、而不及兒孫之艷麗。故人不之察、以為他木、而以桜充左久羅。然桜桃之外、未聞單用桜為木名也。蓋桜桃者、桜元作嬰、以其実似桃而小、猶嬰兒而名焉、後人遂加以木傍、而隨異耳。我邦謂左久

羅為花、猶漢土謂牡丹海棠為花也、而樺字正与此合、可謂奇矣。樺又作華、相如上林賦所云華楓枰櫨、是也。謂樺字之從華、以其唯有華而無実可食也。夫以桜為左久羅、猶以萩為波幾、以霞為加須美之類、其誤甚矣。蓋樺宜於我邦、而不宜於漢土、故彼無賞焉者已。橘之化枳、不過乎一淮水之間、況\*隔海濤万里、則風土復不同、而所生者亦自異、何獨於樺疑之。故予嘗据師說、斷然以樺為左久羅之大名矣。

〔校勘〕

○況 中之島本はここで切れている。続きは手書きのメモに書かれており、昭和 47 年に肥田文庫蔵本で補ったと記されている。

参考文献

- [1] 木崎愛吉『篠崎小竹』（玉樹香文房、1924 年）
- [2] 新田一郎『相撲の歴史』（山川出版社、1994 年）
- [3] 『大阪相撲の歴史』（大阪歴史博物館平成 17 年特別展示図録、2005 年）
- [4] 貝原益軒『芳野山勝景図』（正徳 4 年（1714）刊）  
（国立公文書館デジタルアーカイブで公開）
- [5] 貝原益軒『花譜』（益軒会編『益軒全集』巻 1（益軒全集刊行会、1911 年）所収）
- [6] 貝原益軒『和州巡覧記』（益軒会編『益軒全集』巻 7（益軒全集刊行会、1911 年）所収）  
\*元禄 5 年（1692）、益軒 66 歳の時の作。
- [7] 本居宣長『菅笠日記』（『本居宣長全集』18 巻、筑摩書房、1973 年）\*明和 9 年（1772）、宣長 43 歳の時の作。
- [8] 暁鐘成『西国三十三所名所図会』（1853 年刊）
- [9] 伊藤東涯『盃簪録』（国文学研究資料館電子図書館本）
- [10] 湯城吉信「中井蕉園著『騶碧囊（りゅうへきのう）』の吉野行（上）」（『上方文化研究センター研究年報』15 号、2014 年）

\*本稿は、平成 26 年度科学研究費補助金・基盤研究 C（課題番号 25370257）「関西文化圏を中心とする江戸期の紀行文の形成」（研究代表者：湯城吉信）による研究成果の一部である。